

## 灰の水曜日

2011. 3. 9

マタイ 6 : 1~6, 16~18

皆さん、私たちは今日から四旬節に入りました。教会は、「回心」を呼びかけています。「回心」「悔い改め」というと気が重くなる、ネガティブに受け取る方も多いかもしれませんが、キリスト教は「罪」を「罰」を結びつけるのではなく、「罪」と「恵み」をセットで考えます。「罪」を意識することは、「神の恵み」に近付くことです。私が好きな言葉に「恵みは過去の縛られない」という言葉があります。洗礼を受けて数年して、神様の恵みはこんなものかな？と思っていた時に出会った言葉でした。「そうか、恵みにはまだ先があるのか！」と考え直させた言葉でした。みなさんは、神様からの尽きない恵みを期待しているのでしょうか？「回心」の目的は、「自分の罪」に打ちひしがれるのではなく、「信仰の恵み」を新たに実感することです。

私は、四旬節の初めに当たり提案をしたいと思います。それは、今日、一つのテーマ・目標を選んでそれが成就されることを願って四旬節を過ごすのです。テーマはそれぞれに考えられると思います。過去の傷が癒えたり、人と和解ができたり、自分の価値が低くて悩んでいたたり・・・ずっと気がかりだったことが、神様の新しい恵みによって解消されていくように願って四旬節を過ごすのです。今日は、四旬節の大きなテーマ「罪」について考えてみます。

「あなたは自分が罪深いと思っていますか？」と聞かれたら皆さんはどう答えるでしょう？ 教会の言う「罪」とは、人のものを盗んだり、人だましたりおまわりさんに捕まることをしてしまったか、してないかを問題にはしていません。もちろん犯罪を犯していないことは大事ですが、「罪」とはもっとどろどろした人間の奥にあるエゴイズムとも言えるものです。

普通、霊的に進歩している人ほど、自分の「罪意識」は深まるものです。心を清く保とうと意識する人は、自分の中にある「罪」に痛みを感じています。

聖人は皆、自分の罪深さが分かっていた。だから、「罪」から離れようとゆるしの秘跡も頻繁に受けていました。その「罪意識」には健全なものと、不健全なものがあります。その違いは、痛みながら悔いと書く「痛悔」と、後になって悔いと書く「後悔」の違いで表現できます。「後悔」とは、自分にはあれができなかった、これもできなかったと、自分を責めることです。

「罪」と「罰」をセットで考えてしまいます。なぜあんなことをしたのだろうと、過去の自分を強く否定します。その気持ちが強いと、自分は、神の前に出るに相応しくない、罰せられる存在だと思ってしまうようになって段々と神の恵みから離れてしまいます。

「後悔」しか感じない人の問題点は、自分中心になっている点です。いつも自分の能力や努力を中心に考えています。自分を誇って、調子の良い時は「傲慢」、調子の悪い時は「後悔」しか味わえません。自分が成功したら「傲慢」になり、失敗したらダメな人間だと「後悔」する。どちらか両極端を生きています。「傲慢」にも「後悔」にも神様の恵みが働いていません。

これに対して、「痛悔」は、自分の「罪」で心は痛みますが、同時に神の愛も感じています。「罪」と「恵み」のコンビで考えます。自分の「罪」「弱さ」を通して、神の愛が注がれることが分かっています。「弱さ」は神の「恵み」が働くチャンスだという理解ができています。自分の小ささや至らなさで神の恵みへの「感謝」が同時に湧きあがります。感極まると涙が流れますが、流す涙によって、私たちの魂が清められます。晩年のペトロは、よく涙を流していたと言われていました。流された涙は、イエスを見捨てて裏切ってしまった「痛悔」の気持ちと、それにもかかわらずゆるして下さったことへの「感謝」の両方の気持ちが入り混じったものでした。「痛悔」には「感謝」の心が伴いますが、「後悔」には「感謝」がありません。

では、どのようにしたら、「痛悔」の心が湧き出るのでしょうか？ 一度、自分に与えられているものをすべて神様にお返ししてみましよう。朝起きられたこと、朝食を食べられたこと、ミサに来られたこと、人と会って話ができる

こと、夜眠れること。これらすべては、当たり前のもではなく、神から与えられているものと自覚できます。その恵みを感じる時、傲慢な自分は神の前で謙遜な自分へと変わっていきます。大切なのは神の恵みに心を開くことです。

さて、今日は大斎です。朝食を半分以下、昼食は通常通り、夕食を半分に減らすなど十分な食事をこの日は1回だけにして、キリストの秘義に近づこうとします。四旬節には、今日と聖金曜日が大斎に当たり、60歳以下の健康な成人に義務付けられています。もちろん、断食して節制することは大事ですが、断食とは自分の食事の量を調整することだけを意味するわけではないでしょう。イザヤ書58章の6節以下にこうあります。「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて、虐げられた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。」このような「断食」の精神をもこの四旬節大事にしましょう。

最後に、私が最初に提案したこの四旬節の課題を皆さんに祈りの中で考えてみましょう。「罪」の囚われからの解消でしょうか？ 和解やゆるしでしょうか？ 少し目を閉じて考えてみましょう。3分考えてみましょう。そして、共同祈願のときに心の中で願いを一緒に捧げましょう。できることなら、お互いが願いを分かち合ってみましょう。助け合える部分があるなら断食として奉仕しましょう。私たちが、それぞれの願いをもちながら共に四旬節を歩めることをこのミサで祈り求めましょう。

イエズス会司祭 柴田 潔